
roter monat : CRIMSON CAGE

倉崎 尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

rotter monat : CRIMSON CAGE

【Zコード】

Z3557A

【作者名】

倉崎尋

【あらすじ】

紅い月が支配する、荒廃した世界。そこに独り生きる少年。最早地獄と化した地上で、蠢くように生き続ける意味を探し懊惱する。何故、世界は荒んだのか。何故、文明は廢れたのか。何故、人類は狂つたのか。全てはあの紅に輝く姫娥と、己の中にある。

どれくらい眠つていただろうか。

張り付いた瞼を何とか開けて周囲を確認しようとするけれど、夢の中と同様に視界は依然真っ暗だった。

見上げれば、今宵も鮮やかな緋色の月が、不気味な光を撒き散らしている。

俺はあの月が嫌いだ。毒々しいほどに充血した、生き物の様だから。そして・・・見る度にあの忌々しい記憶が心を搔き乱す。

「・・・・・・・・」

吹き荒ぶ風に躰は凍え、吐く息は白い。

幾枚も服を着込んではいるが、継ぎ接ぎだらけで所々に穴の開いたこの襤褸では、この寒空を到底耐えれそうにない。

俺は掛け布団代わりにしていた新聞紙を、丁寧に折り畳んで懷に閉まつた。

そしてもう一度、妖しく浮かぶ紅い月 ローテル・モナを睨み上げた。

噴き上がつてくる激しい憎悪に、拳を握りながら。

歩き慣れた街並みは、今や悲惨に荒んでいる。

昔の、活気に溢れた豊かな港町の見る影も無い。家屋は損壊し、辛うじて原型を留めている壁や柱には焼け焦げた跡が残り、道路には碎けた硝子や潰された車の破片が飛び散っている。歩いていると足元に黒い粉が舞うのは、渴いて敷石にこびり付いた血が擦られ、捲れるからだろう。

鼻の奥に血臭がじんわりと拡がり、喉の奥には胃液の味が蘇る。

「ひーーー！」

眩暈がして、吹き飛ばされた壁の残骸に俺は崩れ折れるようにして寄り掛かった。

途端胃液が現実に迫上がってきて、道路端に吐瀉物を撒き散らす。呼吸が苦しい。激しく動悸がする。

「くわあ・・・」
「おまつてたんだけどな・・・」

あの一件以来、幾度と繰り返されるこの発作には好い加減ウンザリする。

多分、急に穢れたこの空氣に肺がまだ麻痺していないんだろう。瞳も少なからず影響を受け、色彩が半分くすんで見えるようになつた。

けど、そんな事はどうだっていい。

今は今日を生き延びるだけの食糧と、安全な寝床と、寒さを凌げる布の心配をしてればいい。

腹の足しにもならない自分のプライドなんて、今この時は必要無い。

・・・でも、絶対捨てない。

「・・・っ水瓶！・・・奇跡的に無事だ。・・・他のは・・全滅か」

瓦礫の下を覗き込んで、転がっていた瓶を発見した。

一本だけ上手い具合に隙間に入り込み、割れずに残つていた。

枯葉を巻き込んだ風は、渦を巻きながら傍を通つていく。

その度に転がつてゐる骸がカタカタと音を立て、不気味な音楽が奏

でられる。

どこへ行つたんだろ、う。

あの高かつた蒼穹は。あの濃緑の森は。あの透つた水流は。あの氣高い鐘の音は。あの優しい小鳥の囀りは。

賑やかな声。騒がしい市場。溢れる笑顔。美しい景色。揺れる船影。それが今は。

水瓶の王冠を中身を零さないよつに慎重に開けて、三日振りの潤いを堪能する。

折角汚れ掛けていた内臓が洗浄されていくよつで、其の事を僅かに悔いでいる自分に大きく嗤笑する。

人間なんて、何事も強制されればその型に嵌るように形を変えていく。

それこそ、鈍色の粘土のように。

一息吐いて、不意に背後で何かが動くのを眼の端で捕らえた。

反射的に物陰に隠れて様子を伺つと、大きく輝の入つた鏡が片隅に置いてあつた。

覗き込んだ俺の顔が、幾つも鏡面に散らばる。

俺って　こんな顔だつたんだ。

右眼は腫れ、肌は垢と壊汚れで不衛生な色をしている。

前髪は鼻にまで掛けり、搔き集めて重ねた服は、随分とこの国の文化とは異趣な雰囲気を出している事だろう。

鏡の輝をそつとなぞり、そこへ拳をぶつけた。

破片が地面へと鋭い音を立て落ちた。じわじわと染み出してくる血と痛みを、俺は放心したように見詰める。

「紅い・・・血・・・・」

ふと黯然とした空を仰ぐ。

血よりも血に似た色のローテル・モナが、俺を嘲笑っている様に思えた。

やつぱり、俺は月が嫌いだ。

そして、半分壊れた箸なのに、鮮やかに紅色を脳に送るこの瞳も、嫌いだ。

ローテル・モナが現れたのは半年前。

黒雲が立ち込め、鴉達が不気味に啼き叫び、世界に紅蓮の光が射し込んだ。

一時はその魅惑の縛に入々は魅了され、歓喜した。

学者も専門家も、ロー・テル・モナが一体何なのか解らず終いだつたが、それを前にしてそんな事はどうでもいい事だつた。

一部の宗教団体がこれは神の啓示だ、などと言い出し、その勝手な推察が世の中に蔓延していった。

美しくも怖ろしく、妖しくも生々しいその姿に人は酔い痴れていった。

まるで、催眠術にでも掛かつたみたいに。

やがて紅い光は世界を覆うと、人々の心の奥の狂氣を覚醒させた。ある日突然、善良だつた人間が凶暴化したのだ。

これにより各地で内乱・紛争・虐殺が起こり、急速に世界は血で染め上げられていった。

何故か俺は、そのロー・テル・モナの影響を受けなかつた。

別段特殊な瞳をしていた訳でも、特殊な脳を持つていた訳でもない。狂氣だつて、探せば俺の心にも潜んでいる筈だ。

それなのに。

街には死骸が大量に転がつた。

人間も獣も全て、ごちゃ混ぜに積み上げられていた。

鴉達がそれらを美味しそうに咀嚼している。

まだ息のある人間の、地を這う低い唸りがいくつも重なつて、街は一気にモルグへと変貌した。

実際はそんな綺麗なものではなかつたけれど。

俺は人々が殺戮し合つようになつてからずつと、家の戸棚の奥に身を潜めていた。

狂気に支配されて、今の人々は快楽殺人をする愉快犯と何ら変わりはない。

出て行けば殺される。確実に。

その内殺す人間がいなくなれば、その時は自分で自分を殺めるだろう。

死ぬ事も、感じる痛みも苦しみも虚無感も何も意味を為さない。

ただ掌に残る不思議に柔らかい感触を味わいたくて、凶器を、そして狂気を振るう。

遠くで聽こえる怒号、哀号。

狂つた眼。戦慄と恐怖に塗り替えられた顔。

拳銃が咆える。剣が闘ぎ合つ冷えた金属音。

必死に懇願する聲。殺される瞬間の、口腔内でぐぐもつた呻き。

扉を僅かに開けた、たつた2cmの隙間で行われた出来事には、今も魘される。

ただただ息を殺して、伝づ汗を拭う事もできなかつた。

眼を逸らすのも許されず、鼓膜には醜い悲鳴が沁み付いた。

そして、人間の血は思いの外勢いよく噴き出すのだと知つた。

断末魔はあんなにも烈しく魂を揺さ振られるのだと。

目の前の標的を殺した瞬間の愉悦の微笑みは、凄絶でどこか懐かしいものなのだと。

「今夜はここで寝るか・・・」

屋根もあり、あまり荒らされていない所を見ると他に人の手が加わった事はないようだ。

適度に風も避けられ、近くのブロック塀が静かに泣く。

それにここからはロー・テル・モナは見えない。

ただ寝ている間だけでもあの月の下から逃れたかった。

悪足掻きにしか過ぎないと、嫌なほど解っているけれど。

親友が自分の妹に剣を突き立て、そして神父に首を絞められているのを見た。

普段の柔軟な笑顔が鋭い眼光を放つ表情に変わる様を見た。

その時の何とも表し難い恐怖を思い出して、一瞬大きく身震いする。

「何で・・・何で俺だけ残つたんだ?どうして俺には影響が無い?」

不安の混ざつた疑問が思わず口をつぐ。
だが、答えを、それどころか返答せん聽じえてくる様子はない。

・・・本当に何故。

そろそろ食糧も見つけ難くなつていて、空腹の日々が続いていた。
水は井戸があつたが既に使える状態ではなく、同様に入手が困難だ。
生き延びる為にはここを離れ、どこか新しい地へと行かなければならぬだろう。

もしかすると、自分の他にも生きている人間がいるかもしねりない。

「そう・・・生きたいなら・・・方法はそれしかないんだ・・・」

けれど俺は、そこまで生きたいという意志が強い訳じゃない。
逆にいつでも死んでもいいと思っていた。

人生なんて詰まらない。

特に面白い事も楽しい事もない。

苦しい事も悲しい事もない。ただ淡々と時が過ぎていく。

それだけだった。

ローテル・モナは何故俺を生かした。

こんなどうしようもなくなった世界にただ独り。

紺色の光は淡く滲みながら変わることはない。
けれど、いつもと少し表情が違うような気がした。

些細な違和感。どこか合致しない。

これは・・・俺があの月に何らかの変化が生じたといつ事・・・?

僅かに首を捻り、気を取り直して敷いた新聞紙の上に横たわる。

ああ、今日は何だか酷く疲れた。
凄く眠い。

今夜は風もささやかで、久し振りに静かに眠れそうだ。
服がごわごわとしたが、すぐに気にしなくなつた。

冷え冷えとした地面も体温を奪つていいく間に次第に温かくなつて
いく。

拳がズクズクと疼くが大した事じゃない。
そつと瞼を閉じ、俺は深く墮ちていった。

深く深く、ビームでも深く・・・
逃れられない、紅蓮の囮圈の中へと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3557a/>

roter monat : CRIMSON CAGE

2010年10月9日21時13分発行